# 「抵抗」および「戦術」概念についての考察

牛山美穂

本稿は、文化人類学における「抵抗」および「戦術」という概念について検討することを目的とする。「抵抗」「戦術」という概念は、奴隷、病者、農民、民衆など、主に社会的に抑圧を被っている人々や苦しみを抱えた人々を解釈する際にしばしば用いられてきた。死生学研究は人々の死を扱うだけではなく生の質をも問う学問である。「抵抗」や「戦術」について考察することは、自らの生を生き抜こうとする人々に注目し、その生の質を問う作業といえる。本稿では、「抵抗」「戦術」という概念がどのように出現し、どのようにその概念を変化させてきたのかを検討する。

## 一　抵抗概念について

まず、「抵抗」という考え方がどのように出現したのかを述べる。はじめに注目しなければならないのは、「抵抗」の発想の源泉となるフーコーの権力論である。一九七〇年代に、フーコーは権力と抵抗との関係について次のように記した。

> 権力のある所には抵抗があること、そして、それにもかかわらず、というかむしろまさにその故に、抵抗は権力に対して外側に位するものでは決してないということ。　[Foucault 1976=1986: 123]

「権力のある所には抵抗がある」というフーコーのパースペクティブは、後に様々な研究者によって書かれた抵抗論の根幹を形作っている。さらにフーコーは、抵抗について次のように記述する。

> 複数の抵抗があって、それらがすべて特殊事件なのである。可能であり、必然的であるかと思えば、起こりそうもなく、自然発生的であり、統御を拒否し、孤独であるかと思えば共謀している、這って進むかと思えば暴力的、妥協不可能かと思えば、取引きに素早い、利害に敏感かと思えば、自己犠牲的である。……そしておそらく、これらの抵抗点の戦略的コード化が、革命を可能にするのだ。
> [Foucault 1976=1986: 123-124]

フーコーの述べた抵抗論の特徴的な点は、抵抗が一枚岩的な単一のものではなく、複数的で随所に散らばっ

ており、しかも様々な形をとって現れ出てくるというところにある。さらに、フーコーはこういった抵抗に革命の可能性を見出している。このような抵抗のイメージは、社会的弱者を肯定的に描き出そうとする研究者に多く援用され、一連の抵抗論の基礎となった。複数的で掴み所がなく、しかも革命的可能性を秘めた抵抗というモデルは、権力をもたない社会的弱者を描き出す上で非常に都合がよかった。このモデルを使うことにより、何気ない日常的行為や掴み所のない様々な行動を何かしらの肯定的な意味を付与して描き出すことができるからである。

一方、この頃には抵抗を、革命的要素を秘めたものとして解釈するのではなく、むしろ権力に巻き込まれ回収されるものとして捉える書き方もしばしば見られた。例えば、カルチュラル・スタディーズの分野では、サブカルチャーやポピュラーカルチャーを抵抗として捉える解釈が見られた。ディック・ヘブディッジは、パンクやモッズ、スキンヘッズといったイギリスの若者のサブカルチャーを抵抗として解釈したが、それらが商業主義に絡め取られていくことによって無害化され、抵抗としての意味をなくすことを指摘した。彼の見解では、サブカルチャーは特別革命的な可能性を秘めたものとしては捉えられていない［Hebdige 1979=1986］。また、ヘブディッジ同様、バーミンガム現代文化研究センターに所属していたポール・ウィリスは、イギリスの労働者階級の反学校文化について調査を行なった。彼は、少年たちの反抗が、結局は労働者階級的な価値観の再生産を促進しているという見解を示し、抵抗は結局権力に回収されるのではないかという懸念を示した［Willis 1977=1996］。

このように、抵抗を権力に回収されるものとして描く手法は、近年でもしばしば見られる。例えば、小笠原は日本のＯＬの研究を行ない、彼女たちがいかに女性という弱い立場を利用しながら、それを逆手に取って抵抗を行なっているかを描いた。男性であれば昇進がかかっているために、仕事にはどうしても勤勉にならざる

をえない。それに比べて女性には出世の望みがほとんどないため、男性のように頑張って仕事をするメリットがない。そのため、女性は仕事をボイコットしたり、受身の仕事態勢をとったり、頼まれごとを拒否したりという抵抗行為をとることができるのである。しかし、小笠原は、こういった抵抗は結果的に伝統的な性別役割の再生産に寄与することになると指摘する。OLが男性社員との違いを強調することは、ある特定の女性観を強調することに繋がるからである。それは、不真面目で理不尽で感情的で冷静な判断ができない、といった女性のステレオタイプをますます強める結果になるということである［小笠原　一九九八］。

抵抗を権力に回収されるものとして描く方法論は、結局のところ行為者の抵抗行為がシステム自体を変革する力はなく、むしろそれを補強し再生産するように働くという悲観的な解釈として用いられてきた。しかし、一九八〇年代には、抵抗がたとえシステムを転覆する力がなかったとしても、それを肯定的に描くための解釈として抵抗が使われ始めた。

そのような抵抗論の草分けとして、ジェームズ・スコットが挙げられる。彼は、マレーにおける農民研究を行なう中で、彼らの行なう受動的な不服従やサボタージュや言い逃れやごまかしなどを一種の抵抗として描いた。これらの行為は、まったく革命的な意図はもたず、むしろシステムに適合し、その中でなんとかやっていくためのものである。スコットがこのような行為を抵抗として捉えた事には大きな意味がある。

それ以前には、農民に関する抵抗といえば、「(a)組織的でシステマティックでまとまっており、(b)信念をもっていて私心がなく、(c)革命的結末をもたらすか、(d)支配そのものの基礎を否定するアイデアや意図を体現している」［Scott 1985: 292］（筆者訳）、つまり組織的な農民運動のような形態だけが抵抗として捉えられていた。スコットの意図は、そのような正統的な形をとり、革命的意図をもったものだけを抵抗と呼ぶことに疑問を差し挟み、もっと個人的で日常的でささやかな行為、つまり「(a)非組織的でシステマティックでなく個人的

で、(b)機に便乗しただけで自己満足的で、(c)革命的な結末はもたらさず、(d)意図や意味の中に、支配的システムに適応することが含まれている」[Scott 1985: 292]（筆者訳）ような行為を、異なる意味での抵抗として捉えようとしたということである。特に、スコットの抵抗論が画期的だった点は、(d)にあたる抵抗の目的の捉え方についてである。

> 結局、農民の抵抗の目的は、直接支配的システムを転覆したり変化させたりすることにあるのではなく、むしろ今日、今週、この季節を生き延びることにある。……彼らの意図は、ほぼ常に、生き延び存続することにある[Scott 1985: 301]。（筆者訳）

革命的意図はもたず、システムに適応しながらその中で生き抜いていこうとする行為は、ヘブディジやウィリスの見方によれば、権力に回収されシステムを再生産する行為として捉えられかねない。しかし、スコットはこういった行為を悲観的に捉えるのではなく、むしろ肯定的に描きなおそうとしたのである。

これと同様の考え方は、ジョン・フィスクにもみられる。彼は、ポピュラーカルチャー分析を行ない、マドンナ・ファンの少女や、サーフィン、ニュースを読むことなど様々なポピュラーカルチャーを抵抗として解釈した。彼は『抵抗の快楽：ポピュラーカルチャーの記号論』の中で次のように述べる。

> （日常生活における一つ一つのことがらについての政治的前進は）わずかであるにしても、社会的な権力関係を変化させる。そうやって前進させていくのが、体制に対する直接的な反抗というかたちをとらずに、体制の内部でかつ対抗的になんとかやっていく、弱者の戦術なのである。その関心は自分たちを支配

する体制を変革することよりも、むしろ弱者層の領分を拡大することにある。　[Fiske 1989=1998: 22]

「戦術」もしくは「抵抗」という言葉を使うとき、フィスクは直接的にではないにせよ、間接的に社会に変化を起こさせるチャンスがあると含みをもたせる。彼は続けて次のように述べる。

逃走的抵抗や記号論的抵抗にできるのは、そうした条件が熟すのを手助けすることができるという民衆の意識、ときがきたらいつでもその好機をのがさずに利用する態勢にあるという民衆意識を保ちつづけることである。……この抵抗もミクロレベルにおいては社会的な力を発揮するのである。ミクロレベルにおける抵抗はマクロな構造を侵食する力として働き、内部から態勢を弱体化して、構造レベルでの変化を受けいれやすくする。　[Fiske 1989=1998: 23]

スコットとフィスクが異なる点は、スコットが抵抗を社会変革させるための行為ではなく、むしろ社会に適応するようなものとして描いたのに対し、フィスクは、抵抗にかすかながら社会を変化させる要素をもつものとして描いている点である。そして、両者の共通点としては、行為者に特別な抵抗の意図がない行為を、抵抗として位置づけていることである。

## 二　抵抗論批判

行為者の意図をどう捉えるかという問題は人類学の中では非常に重大なトピックである。一九九〇年代以

降、この点に関して人類学の中から抵抗論に対する批判がみられるようになる。人類学の特徴は、社会学や歴史学などほかの学問と異なり、フィールドワークを通して対象となる文化の人々と直接対峙するところにある。こういった学問的特徴から、研究者は自分と異なる文化に属し、異なる考え方をする人々の考えや意思や意図をどう捉えるかという問題に直面し続けてきた。人類学の用語であるエミックとエティックという語の区別は、対象者の内部的な考え方（エミック）と、外部的な考え方（エティック）という二種類のレベルが存在することを物語っている。しかし、エミックとエティックを区別すること自体に、研究者によるメタレベルの解釈を特権化し、現地の人々の考えや意図を一段低く見るような構図が見え隠れする。一九八〇年代以降、ジェイムズ・クリフォードらが人類学批判を通して行なってきたのは、こういった研究者の特権的なポジションを解体し、研究者の視点と対象者の視点を同じ地平に位置づけようとする試みだったのではないか［Clifford & Marcus 1986=1996］。

このように考えると、スコットやフィスクの描いた抵抗論は、人類学の信条と食い違いを起こすようにみえる。マレーの農民の行為を抵抗として描いたスコットの意図は、従来抵抗として解釈されてこなかった行為を抵抗として解釈することによって、従来の概念をくつがえすという点にある。しかし、研究者が対象者に何らかの意図を読み込むという解釈の仕方は、研究者のポジションを特権化し、対象者の意図を無視して解釈を行なうという人類学が批判してきた姿勢に繋がりかねない。この点で、抵抗論は人類学から批判を浴びせられることとなる。

具体的に抵抗論を批判したのは太田好信である。彼は、パンクを若者たちの抵抗として解釈したヘブディジを批判して次のように述べる。

ヘブディジの著作を読んでいると、ある素朴な疑問が浮かぶ。たとえば、サブカルチャーの担い手たちは、意識的にスタイルによる抵抗を行なっているのだろうか。実は、ヘブディジはすでにこの疑問に答えている。「すべてのパンクが自分たちの経験と意味のズレに等しく気がついているわけではない。もちろん、このズレに彼らのスタイル全体の基盤があるわけだが。」ならば、ヘブディジの解釈を正当化するものは何なのか。少し意地の悪い見方をすれば、彼自身がパンクやスキンヘッドたちの「政治的無意識」を、裏づけなしに勝手に読み込んでいるようにもみえる。

［太田　二〇〇一：六七］

さらに、太田は自分の意見を次のように述べる。

人類学が保持しつづけてきた学問の信条の一つは、対象の「生きられた現実（lived reality）」を内在的に理解することである（……）。だから、サブカルチャーを構成する若者たちが、スタイルをとおして抵抗しているかどうかという疑問にたいしては、調査者が勝手に答えを出すことは慎まなければならない。

［太田　二〇〇一：六七］

太田は、人類学者の解釈も一つのパースペクティブの産物であり、何よりもまず「他者の現実」を見失わないこと、つまり研究対象の「生きられた現実」の内在的理解を目指すことが重要であると強調する［太田　二〇〇一：六八］。太田のスタンスは、人類学自体のもつ権威に内省的、批判的であろうとする姿勢で貫かれているため、あくまで行為者の意図を優先するべきだという意見にたどり着く。

また、アブ＝ルゴッドも「抵抗のロマンス：ベドウィンの女性を通して権力の変容を追う」において、抵抗

論に対する批判と疑問提起を行なっている。ルゴッドは、自分自身が過去の論文において抵抗をロマンス化して書いてきた傾向があったことを認め、次のように述べる。

> 幾つかの私自身の初期の論文では、（……）抵抗をロマンス化する傾向があった。すべての抵抗の形式を、権力のシステムの効果のなさ、そして支配されることへの拒絶のうちにある人間の精神の回復力と想像力のサインとして読み込んでいた。このように抵抗を読むことによって、私たちは抵抗の形式の間の区別を壊し、権力の働きについての特定の問題を除外してしまった。［Abu-Lughod 1990: 41-42］（筆者訳）

こうした反省にたって、ルゴッドはベドウィンの女性たちの抵抗を分析する上でのジレンマを次のように語る。

> いかにして私たちは、――フェミニストの意識やフェミニストの政治のように――行為者の経験の一部ではない意識や政治の形態を彼らに帰する誤りをおかさず、また、彼女らの実践を前政治的、原始的、あるいは誤って導かれたものとして過小評価したりせずに、行為者が、彼らの生活をそれほどまでに支配している者の権力にさまざまな創造的なやりかたで抵抗することを認める理論を展開できるだろうか。
> ［Abu-Lughod 1990: 47］（筆者訳）

この問いに続けて、さらに彼女は、ベドウィンの女性たちを虚偽意識や印象操作といった分析概念に訴えることなく、彼女たちが権力の既存のシステムに抵抗しながらそれを支えているということを説明するには、どうすればいいか自問自答する。彼女たちの考えを虚偽意識として解釈してしまうと、ベドウィンの女性たちの

考えや意図を退け、研究者の解釈を特権化してしまうことになるし、彼女たちが印象操作をしていると解釈すれば、彼女たちを皮肉な操り手として描くことになってしまう。同時に、ルゴッドは、抵抗の形式を個人的なカタルシスや安全弁として解釈することにも警鐘を鳴らす。

このような対象者の解釈に関する問題は、医療人類学の分野でもなされている。バイロン・グッドは、ルゴッドを引用し、彼女の問いを引き継ぐ形で次のように述べる。

> いかにしてわれわれは、生きられた経験のリアリティについてのわれわれの理解を高め、なおかつ行為者がぼんやりと気づいているだけのより大きな社会的、歴史的過程に言及するようなやり方で、病いについて書くことが可能なのだろうか。 [Good 1994=2001: 105]

ここでは、対象者の「生きられた経験のリアリティ」を過小評価することなく、しかもより大きな社会的、歴史的過程に言及するアプローチの可能性が模索されている。ここにおいて、抵抗論とそれが孕む研究者の解釈の問題は再考を促される。

一方、小田亮は、太田のいうように当事者自身の意図を優先するべきだという意見に対して反論を行ない、抵抗論を擁護する。彼はアフリカン・アメリカン文化の研究者であるシドニー・ミンツを引きながら、奴隷が行なってきた暴力を伴わない行為——仮病、自殺、サボタージュ、人工妊娠中絶、愚鈍をよそおうこと、毒物を使うことなど——を、抵抗として解釈するべきだと述べる。

ミンツは、これまで抵抗とされていなかった「日常的抵抗」を「抵抗」として認めることが重要なのだと

いう。そのような実践を「抵抗」とみなさないと、たまに起こる少数の武器を手にした抵抗者以外の大多数の奴隷たちは、ただ受動的で従順に運命に従っていたことになってしまうからである。［小田　二〇〇三］

さらに小田は、研究者が外から抵抗と解釈することは、「物言えぬサバルタン」に代わって「表象＝代弁」するという、上からの権力を用いることになるのではないか、という批判に対して、次のように答える。

実践の当事者が意識していないのにその実践を抵抗と解釈することへの批判も、自分をそのような実践をしている他者と切り離していることが問題となるのであって、たんに他者の行為をその人が意識してはいなかった意味づけをすることじたいは、その行為をそれまでとは異なる文脈に位置づけて新たな意味を発見することにもなる。つまり、重要なのは、他者の意識していない実践を解釈しないようにすることにあるというより、実践の当事者の生活の場と研究者自身のそれとを切り離すことなく（……）、むしろ自己と他者が差異をふくみながら同じ場において対話するために、他者の実践を自己の実践と結びつけて解釈することにある。［小田　二〇〇三］

小田は、研究者が当事者に対して上に立っているという前提を否定し、研究者自身も当事者と同様近代の支配システムに包摂されておりそこから免れているわけではないこと、ゆえに当事者と同じ地平に立っている認識をもつべきだと主張する。小田の意見は、研究者が上から解釈をするという批判に対し、研究者の権威を疑問に付し当事者と同じ地平に位置づけることによって、権威的でない解釈をしようというスタンスである。

しかし、結局、現在「抵抗」という言葉は、使用する際にわざわざ弁解しなければならないほど、扱う事が

難しい概念になっている。抵抗概念をどのように捉えるかは研究者によって相当な幅があるが、整理するために次の二点に着目したい。一点目は行為者に抵抗の意図があるかないかという問題であり、もう一点は、抵抗が社会を変化させる可能性があるかないかという問題である。前者がミクロな視点だとすれば、後者はマクロな視点といえる。

一点目の問題について述べれば、行為者に抵抗の意図がある場合は、ほぼ問題なくそれは抵抗として位置づけることができる。たとえ、抵抗の意図がありながらそれに失敗しても、それはヘブディジやウィリスが描くように、権力に回収されシステムを再生産するような抵抗として位置づけられることになる。

問題は、抵抗の意図のない行為を抵抗と呼ぶかどうかという点にある。スコットは、行為者に対する好意的な視点から、マレーの農民の行為を抵抗として描いた。しかし、研究者の意図が好意的なものであろうと、行為者の意図を超えて研究者がそこに抵抗の意図を読み込むことは、解釈上非常に危うい行為となる。太田のようにあくまで当事者の意図を尊重するのであれば、スコットの描いた農民やミンツのいう奴隷たちの行為は抵抗とは認められない。だが、スコットやミンツの時代には、こういった行為を抵抗として位置づけることで、今まで深く取上げられてこなかったサボタージュや拒否といった行為を肯定的な視点で拾い上げるという重要な意味があったことは確かであろう。

二点目の問題について述べれば、抵抗論には行為者に抵抗の意図がない行為のうち、それが社会を変化させる可能性を秘めていると考えられるものと、そうではないものとに二分して考えることができる。スコットやミンツの描いた抵抗は、後者、つまり行為者に抵抗の意図がなく、システムの転覆や変革を起こす可能性もないと考えられる行為だった。ここでこういった行為を抵抗と呼ばしめているものは、研究者の解釈のみということになる。

一方、行為者に抵抗の意図がなくても、そこに何がしか社会を変える要素を見出し抵抗として描いたのがフィスクだった。しかし、この場合も、実際にポピュラーカルチャーを実践する行為が社会を変化させているかどうかという確証はなく、それはフィスクの解釈の域を出ない。この意味で、スコットもミンツもフィスクも、行為者に勝手に抵抗を読み込んでいるという批判は免れ得ないだろう。

だが、スコットやミンツやフィスクの描いた行為は、抵抗という言葉を使いさえしなければ批判を免れる可能性はある。次に述べる「戦術」は、彼らが描いた行為とほぼ同じ内容を指しながら、表現を変えたことで批判を免れている。

## 三　戦術概念について

「戦術」の概念をはじめに打ち出したのは、ミシェル・ド・セルトーであろう。ここで述べる「戦術」は、スコットの述べた抵抗の意味合いと非常に近い。スコットは、直接システムを転覆させるような目的をもたず、むしろシステムに適合しながらなんとか生き延びるためのやり方を「抵抗」と定義づけた。「戦術」も同様、システムを直接転覆するのではなく、その中でなんとかやっていくための方法として捉えられる。

セルトーは戦術という言葉を使い、弱者が「他者の場」において自分の利益を確保するやり方について述べた。その例として、スペインに植民地化されたインディオが従順に従う振りをしながら、自分たちの利益に即するように元の目的を利用していたことを挙げている。

たとえば、スペインはインディオの植民地化に成功したが、実はその「成功」がいかに両義的なもので

あったか、つとに明らかになっている。かれらインディオたちは、押しつけられた儀礼行為や法や表象に従い、時にはすすんでそれをうけいれながら、征服者がねらっていたものとは別のものを作りだしていたのだ。かれらはそれらを忌避したり変えたりしていたわけではなく、それらをちがった目的や機能、自分たちが逃れるべくもないそのシステムとは異質な準拠枠にもとづいた目的や機能に利用しながら、それらをくつがえしていたのである。

[Certeau 1980=1987: 14-15]

このようなやり方を彼は「戦術」と呼び、次のように述べる。

わたしが「戦術」とよぶのは、これといってなにか自分に固有のものがあるわけでもなく、したがって相手の全体を見おさめ、自分と区別できるような境界線があるわけでもないのに、計算をはかることである。戦術にそなわる場は他者の場でしかないのだ。(……) 弱者は自分の外にある力をたえず利用しなければならないのである。

[Certeau 1980=1987: 26]

さらに、セルトーは「「民衆たちの」戦術が、そのうち体制も変わるだろうなどという甘い幻想をいだかずに、さっさと自分らの目的のために何かを横領している」[セルトー 1987: 85] と述べ、こういったあり方を肯定的に描き出したのである。

ここで述べられている「戦術」はスコットの「抵抗」概念と非常に近く、実際「抵抗」と「戦術」はしばしば同じような意味合いで使われる。そして、戦術は直接的にではないにせよ、間接的に社会に変化を起こさせるチャンスがあると含みをもたせて描かれる。セルトーは、システムには不測の出来事、波乱の時が起こりう

ると述べ、「日常的実践は、機会なくしては在りえない実践として、波乱の時と結ばれている」[Certeau 1980=1987: 395] と述べる。

セルトーの述べる戦術は、抵抗の意味合いと非常に近かったが、以後、これは他の研究者たちによって「抵抗」とは異なるニュアンスで引用され使われるようになる。ある行為を「抵抗」として解釈する際の問題点は二点あった。一点目が行為者の意図の問題であり、二点目が社会やシステムに変化を及ぼすか否かという問題である。「戦術」は、「抵抗」のように社会やシステムに対して抗う意図はなく、これらに変化を及ぼさなくても矛盾なく使用できる概念である。そのため、「戦術」という言葉は、社会を変化させるというニュアンスを削ぎ落とし、その代わりに自己の問題、アイデンティティの問題として語られるようになる。

例えば、浮ヶ谷幸代は、セルトーの戦術の概念を引用しながら、糖尿病患者が自分のことをどのように人に語るかという問題について記述する。浮ヶ谷は、糖尿病患者会で調査を行ない、患者会員たちが状況によって「糖尿病であること」を表明したり、秘匿したりする様子を描いた。これは一見、場所や状況や相手によって話すことを変えるという、首尾一貫せず矛盾した行為に思えるかもしれないが、浮ヶ谷はこれを患者の戦術として捉える。

> 「糖尿病であること」を秘匿する、あるいは告知する人々の置かれている状況を多様な文脈としてみたときに、そうしたやり方はむしろ個人がそれぞれの環境条件のなかで自分にとって「なんとかやっていく」「もののやりかた」であり、「他者の場所」でしか生きられない「戦術」としてみえてくるからである。彼らはそれぞれの文脈に沿って、ある時は「病気である」と告知する、またある時は「病気ではない」と表明するというように、「病気である」と「病気ではない」のカテゴリーを横断しながら、その境界線上に

両義的なまま生きていることを示している。

［浮ヶ谷　二〇〇四：七八―七九］

さらに、浮ヶ谷同様、余語琢磨もアトピー性皮膚炎患者の困難を乗り越えようとする姿勢を戦術として描く。余語は、インターネット上のアトピー性皮膚炎患者の「病いの語り」[1]を拾い出し、その中で戦術としての語りの分析を行なう。余語は、アトピーに対する「肯定的な語り」が見られることを指摘し、そうした物語には一定の様式があると述べる。その要素は「(1)絶えず考え、迷いながらも、自分で選択していくこと、(2)社会や自らが設定した規則や目標に固執しすぎず、柔軟に対応できること、(3)日常生活のなかで病いと折り合いをつける諸方法を身につけること、(4)失ったものとともに得たものがあると思えること、(5)自らのやり方を理解する同病者や家族・知人、医療者などを得ること」の五点として抽出可能であると述べる。こうした語りに見られるように、アトピー患者は、逸脱を許さない諸々の制約を、自らの選択や工夫の中で肯定的に読み換えながら、病の経験と折り合いをつけている。このような姿勢を、余語は、「劣った規範」を柔軟に読み替えながらアトピーを肯定的に捉え直そうとする戦術として記述するのである［余語　二〇〇三］。

浮ヶ谷、余語は、「戦術」という言葉を使いながら、対象者を肯定的、かつ能動的な存在として描き出そうとしている。その際に、「戦術」はアイデンティティの読み替えを中心とした個人の問題として用いられる。これは、「抵抗」が社会やシステムの変更を問題とし、外に向かって変化を期待していたのとは逆である。ここでの「戦術」は、自己の内側へと向かい、自己の捉えなおしによって現状を肯定しようとするもののように捉えられる。

セルトーの述べた「戦術」は、スコットの「抵抗」概念に近く、両者にほとんど差異はなかった。しかし、抵抗論が数々の批判に晒され、使用するのが難しくなってきた中で、「戦術」という言葉が使用されるように

なっている。それは、「抵抗」のような社会に対して変化を起こさせる理論が通用しにくくなり、より社会に適合的な理論の方が現実味を帯びてきていることを反映しているからかもしれない。

## 四　結論

本稿では、「抵抗」及び「戦術」概念を再考し、批判点、問題点を分析する作業を行なった。抵抗論については、フーコーの理論を起点に、権力に回収されシステムを再生産するようなものとして描く捉え方、反対に抵抗を肯定的に描く捉え方を示した。次に、こうした抵抗論に対する批判を紹介し、特に行為者に抵抗を読み込む解釈が人類学における行為者の意図を優先する姿勢と食い違いを起こすことを示した。最後に、抵抗ではなく戦術として人々を描く考え方を示しながら、戦術が持つシステムに適合的な側面についても触れた。

このような研究上の解釈の変遷は、人々の生に対する考え方の変遷を反映していると考えられる。そもそも「抵抗」「戦術」という概念が想定する人間像とは、社会に対し積極的に働きかける積極的で肯定的なイメージのものである。スコットやフィスクの抵抗論は、人間を肯定的に描こうとするあまり、過剰な抵抗の読み込みを行ってしまったといえる。しかし、こういった解釈が出現した背景には、人間を社会やシステムに抵抗したり戦術的に動いたりする積極的な像として捉えたいという願望が存在していたのではないか。

フーコーは、人間を描く際に「主体（subject）」という言葉を使い、これを権力に従属する存在としても描いた。しかし、ポスト構造主義以降、こういった人間のあり方の捉えなおしが起こり「エイジェント／エイジェンシー」という概念がみられるようになる。これは、人間を権力に対する従属的な存在としてではなく、システムに対する攪乱の可能性を秘めたものとして捉えるような概念である。フーコーによる主体の捉え方では、

既存の社会やシステムを変更するような理論は望みにくいのに対し、「エイジェント／エイジェンシー」という概念を用いれば、既存の社会やシステムを変化させる理論の可能性が開ける［末廣　二〇〇〇、Butler 1990］。人間を社会に対する攪乱の可能性を秘めたものとして描きたいという願望は、人間の生を考える際、現代の数多くの研究者の中に深く流れていると考えられる。「抵抗」や「戦術」といった概念もこういった大きな流れの一端として捉えることができるのではないか。そのため、本章の最後に述べた「戦術」概念が示すものも、システムに適合的ではあってもなお積極的、戦術的に社会を生きていこうとする肯定的な人間像を描きたいという願望のひとつの表れとして捉えられるのではないだろうか。

【引用・参考文献】


Abu-Lughod, Lila, 1990　The romance of resistance: tracing transformations of power through Bedouin women, *American ethnologist* 17, 41-55.

Willis, Paul, 1977 *Learning to labour: How working class kids get working class jobs*. Ashgate. =一九九六　熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども：学校への反抗　労働への順応』、筑摩書房。

浮ヶ谷幸代　二〇〇四　「「病気である」と「病気でない」を生きる」『現代医療の民族誌』、明石書店、四七―八六。

太田好信　二〇〇一『民族誌的近代への介入：文化を語る権利は誰にあるのか』、人文書院。

小笠原祐子　一九九八『ＯＬたちの「レジスタンス」：サラリーマンとＯＬのパワーゲーム』、中央公論社。

小田亮　二〇〇三「日常的抵抗論Web版」http://www2. ttcn. ne. jp/~oda.makoto/mokuji. 12. 10ed. htm

Good, Byron J, 1994 *Medicine, rationality and experience: An anthropological perspective*, Cambridge University

press, = 二〇〇一　江口重幸・五木田紳・下地明友・大月康義・三脇康生訳、『医療・合理性・経験：バイロン・グッドの医療人類学講義』、誠信書房。
Kleinman, Arthur, 1988 *The Illness Narratives: Suffering, Healing and the Human Condition*, Basic Books. = 一九九六　江口重幸・五木田紳・上野豪志訳『病いの語り：慢性の病いをめぐる臨床人類学』、誠信書房。
Clifford, James, & Marcus, George E, 1986 *Writing Culture: the Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press, = 一九九六　春日春樹・足羽与志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子訳『文化を書く』、紀伊國屋書店。
末廣幹　二〇〇〇「エイジェンシー」『現代思想』28(3)、五二-五五。
Scott, James C, 1985　*Weapons of the weak : everyday forms of peasant resistance*, Yale University Press.
Certeau, Michel, 1980 *Art de Faire*. Paris : Union Generale d'Editions. = 一九八七　山田登世子訳『日常的実践のポイエティーク』、国文社。
Butler, Judith, 1990 *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. Routledge. = 一九九九　竹村和子訳『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社。
Fiske, John, 1989 *Reading the Popular*. Routlege. = 一九九八　山本雄二訳『抵抗の快楽』、世界思想社。
Foucault, Michel, 1976 *La Volonte de Savoir Volume 1 de Histoire la sexualite*, Gallimard. = 一九八六　渡辺守章訳『性の歴史1　知への意志』、新潮社。
Hebdige, Dick, 1979 *Subculture: The Meaning of Style*. London : Methuen. = 一九八六　山口淑子訳『サブカルチャー』、未来社。
余語琢磨　二〇〇三　「「アトピー」をめぐる病いの語り：インターネット上にみる病者の苦悩と戦術」『自治医科大学看護学部紀要』1、四一—五四。

（1）「病いの語り」とは、アーサー・クラインマンの言葉である。彼は、「病い」を観念、感情、家庭や職場での対人関係、広く共有されたイメージ、経済的な力、ケアや福祉の社会的機構などと結びついた患うことの経験として捉える。クラインマンは、こうした病いの経験を物語を通して自分自身や他人に語ることを重視し、これを「病いの語り」という言葉で表している。

（うしやま・みほ　早稲田大学大学院文学研究科博士課程・早稲田大学文学部助手）

# The notions of "resistance" and 'tactics'

Miho Ushiyama

"Resistance" and "tactics" are often used to describe the weak such as slaves, sufferers or peasants. In this paper, I review the notions of "resistance" and "tactics", and describe the critics and problems about the notions.

First I review the notions of power and resistance by Michel Foucault. He says that "where there is power, there is resistance, and yet, or rather consequently, this resistance is never in a position of exteriority in relation to power". His notion of resistance has influenced the academics. Next I describe the notions of resistance by Paul Willis and Dick Hebdige. They regard resistance as something sustaining and reproducing the existing systems. Then I write about the notion of resistance by James Scott. He suggests that resistance should not only be something revolutionary but also include everyday practice with no intention of revolution.

In the 1990s and 2000s, some anthropologists criticized resistance theories. They insisted that researchers should not interpret the practices with no intention of resistance as resistance. They said that the researchers must not neglect the "lived experience" by the agents and should keep from interpreting as they wanted.

At last I introduce the notion of "tactics" by Michel de Certeau. I regard "tactics" as something similar to "resistance" defined by Scott. However, some academics quote "tactics" with new meanings. Ukigaya and Yogo use "tactics" to describe sufferers. According to them, though such people are suffered by diseases, they try to regard themselves as living positively. Ukigaya and Yogo describe their attitudes as "tactics" relevant to identity. In this sense, "tactics" appears different from "resistance". I consider that

"resistance" is a word relevant to society, but "tactics" defined by them is used to describe identity.

The definitions of the notions change according to the change of society. The criticisms and transitions of the notions of "resistance" and "tactics" reflect the change of society